

# 隨泉寺寺報

平成22年(2010年)7月号 第479号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

安居会法座

講師 安芸津 妙専寺 田坂法雄師

講題 『仏となるいのち』

■安居会法座 ～お釈迦様の時代からの行事～《仏教徒の勉強期間》

向こう一週間予報を見ても、以前として雲か雨マークの連続、7月に入ってもまだまだ雨が続きそうな気配である。南米沖のエルニーニョ現象が関係しているのだそうだが、大きな地球規模の現象相手ではどうしようもない。こんな時こそ仏教の勉強期間である。

安居とは元々、梵語の雨期を日本語に訳したもの。

本来の目的は雨期には草木が生え繁り、昆虫、蛇などの数多くの小動物が活動するため、遊行(外での修行)をやめて一カ所に定住することにより、小動物に対する無用な殺生を防ぐ事である。後に雨期のある夏に行う事から、夏安居(げあんご)、雨安居(うあんご)とも呼ばれるようになった。

釈尊在世中より始められたとされ、その後、仏教の伝来と共に中国や日本に伝わり、僧侶の教義の勉強期間となった。

## 7月の法座予定

- 7月11日……………掃除 上平原第2
- 7月14日昼席午後1時より……………安居会法座
- 7月14日夜席午後7時より……………出張法座 上平原集会所
- 7月15日朝席午前10時より……………門信徒の集い おとぎ
- 7月15日昼席午後1時より……………安居会法座
- 7月15日午後3時より……………仏婦役員会
- 7月25日午後5時より……………ビアガーデン
- 8月2日午後6時より……………門信徒会本部役員会
- 8月3日午前9時より……………少年少女の集い

## ☆少年少女の集い 一日研修会(小学1年～6年)

8月3日(火) 午前9時より

今年も昨年と同様1年生～6年生まで合同の少年少女一日研修会を8月3日(月)に開催いたします。今年も楽しい企画を考えています。友達を誘って参加してください。朝から夜までの一日ですが、



1年生～6年生の人と一緒に楽しい一日を過ごしましょう。

時間が長いので1年生にとっては少しハードですが、夏休みの楽しい思い出になってくれたらと思っています。



## ☆隨泉寺ビアガーデン 7月25日(日)午後5時～



今年も7月25日午後5時から隨泉寺ビアガーデンを行います。毎年第4土曜日に開催していましたが、宇品の花火大会にかち合うので、今年は日曜日にしました。時間も5時から仕事で参加できないという人がありましたが、日曜日なら初めから参加できると思います。



ビアガーデンの日は雨が降ったり、雷が鳴ったりして、ジョッキ片手に右往左往ということがよくあったのですが、今年はいい天気になればいいのですが……。お寺は皆さんのものです。どうもお寺の敷居が、高いのではないかと思います。まずはビールを飲んで、それから少しずつお寺に近づいてください。一人で恥ずかしい人は友達を誘ってきてください。



## ☆研修旅行

三原 法泉寺・光徳寺・徳正寺 9月10日(金)

恒例の一日研修旅行に行きます。今年三原市久井の法泉寺・光徳寺 大和町の徳正寺の

三カ寺にお参りします。

法泉寺は本願寺の中央講師の小島照行先生のお寺です。

光徳寺はご存知の方もいると思いますが、藤田徹文先生のお寺です。先月もNHKの宗教の時間でお話をしておられました。大変有名な先生です。私がお寺の伝道院というところで勉強した時の先生です。

# 7月 信心をうれば 暁になるがごとし

『尊号兼像銘文』（註釈版聖典 679 貫）

ある冬に、霜が降りて、鉢植えの観葉植物が枯れてしまいました。再び芽を出すことはないと思って、枯れた葉を全部切り取って、家の隅に置いておきました。数カ月して、何気なくその鉢を見ると、見事な葉っぱを繁らせていました。

もちろん、霜が降りなければ、葉は繁ったままで、時期が来れば、少しずつ葉が生え替わります。

暁とは、夜明けのことです。夜明けは、希望を感じさせる言葉です。暗雲に覆われて夜明けの空が見えなくても、必ず陽が昇ってきます。信心を得れば、煩惱の暗雲に覆われていても、必ず仏のさとりを得ることを示したのが「信心をうれば 暁になるがごとし」です。

私たちは、煩惱を持った存在です。もし信心を得たとしても、その姿は人によって異なります。

鈴木章子さんは、元々熱心な念仏者であったと思われすが、肺ガンになり、ご自身の死を意識されるようになって、あちこちから仏の教えが聞こえてくるといわれ、闘病の場である病室がよろこびの場であると「今現在説法」という詩で詠われています。

《今現在説法》

肺がんになって ここ あそこから

如来様の説法が 少しずつ きこえてきます

大変感銘深い詩です。しかし、誰もが死を見つめて、鈴木さんのような心境になるわけではありません。ある念仏者は、ガンになり、「厳しいご催促です。今まで何を聞いていたのでしょうか」といって、ご自身の信心を問い直すような法話をされてきました。また、「煩惱はあるにはあるが、人並みだと思い、罪悪は、深重といえは深重なのだろうが、親鸞聖人がいわれるほど、罪悪深重とは思えない。こんないい加減な私であるが、きっと、仏さまは何とかしていただけるのであろう」と感じていた人は、大病をしても、「何とかしていただけるだろう」という気持ちは変わらなかったといわれていました。

先の観葉植物の土の上の姿と根っこのようなもので、表は人それぞれです。「今現在説法」のど真ん中と受けとる人もいれば、厳しいご催促と受けとる人もいます。しかし、信心をいただくと、外の姿は、どのようなものであっても、仏の道が開けていることが、私にとっては希望を懐かせ、ありがたく感じさせられます。

## 母の死



実家の母がお浄土に往生いたしました。いつかはその日が来ると思っていたが、あまりにも突然で戸惑いました。6月23日は父の命日で電話で長い話をしました。

母が《あなたももう60なんだから体を気をつけなさい。お酒も控え目にして、無理をしないように》と私を気遣ってくれました。6月25日の朝にトイレに行ったら帰りに胸が痛くなって倒れたそうです。救急車で出ましたが大動脈剥離ということで、そのまま亡くなりました。妹からの電話で駆けつけましたが、間に合いませんでした。顔を見たとき、悲しみももちろんでしたが、《お母さん、よくがんばったね、よかったね》とほっとしたのも事実です。

4年ぐらい前に脳梗塞で半身不随になってから、妹が看てくれていました。頭ははっきりしていましたが、だんだん体が不自由になり、機能が衰えていくのが顕著でしたから、やがては広島へ来てもらおうかと思っていました。つらいのも悩ましいのも生きてあるうち、生きていればこそでした。釈尊の死は涅槃と呼ばれました。命を燃やし尽くして大いなる安らぎに入られたという意味であろうと思います。

葬式は兄と私と兄の長男とで勤めました。わが母の葬儀と勤めていたら、不意に悲しみが襲ってきて、涙でお勤めが出来なくなりそうで、必死でこらえて勤めました。終わってからトイレに入って大声で泣きました。外に聞こえると恥ずかしいので水を流して音を消しながら……。

葬儀は、故人の生涯をとぶらい、自分との縁の重さに思いを致す儀式です。また、れの悲しみを癒すもの、生と死を越えて じ合う道を示すものです。

葬儀を終えてほっとしたのですが、日がたつにつれて悲しみが湧き起ってきます。

れの悲しみの中から、人と生まれ、人と育てられたことの重さを見だし、ようこそ ようこそ 私を生んでくださいましたと、感謝の気持ちと同時に、体の中心に大きな穴が開いた感じで、底知れ 絶望感があります。一番大切なもの、私を100パーセント受け入れてくれる大きな大きな存在を失ったという喪失感があります。

このやり場のない悲しみが私一人のものでなく、あの人の、またこの人の、そして数知れ 先人たちの背負ってきたものであったと知らされたとき、幾千億の人々が流してきた涙が、今日は我がまなこから、流れ落ちているのだと気づいたとき、大いなる大悲の中に抱かれて、涙されている我が身を感じたのです。確かにその人が生きていた。このように生きて、という事実を大切に受けとめ、私が受け継いだのは生命だけではなかった、私を包み込む大きな働きが今ここにあるというという驚きと畏敬となりました。

まことに仏法こそ、人間の悩みの中から現れ出た光であり、心の闇路に届く、慈悲の呼び声でありました。